

### Q3-7 「森は海の恋人」とよばれる理由は（魚つき林）

「森は海の恋人」とは、宮城県で牡蠣（カキ）の養殖漁場を守るために上流から下流まで一体となって取り組む必要があると訴えて植林活動を始めた時のスローガンです。わが国には魚つき林という言葉があり、海に面した森林は魚に日陰や餌などを提供し、漁獲量を増やすと考えられています。海から離れた上流の森林も様々な養分を供給し、川や海の生物を支えています。このほか水にすむ生物にとっては、森林の流出量を調節する機能（Q1-6）や土砂の流出を防ぐ機能も生存にかかわる大切な問題です。「森は海の恋人」というスローガンは、海の生物から見た森林の大切さを訴えています。

上流の森林では、溪流沿いに生えている溪畔林の役割が重要です。溪流の上に伸びた枝は日光を遮ることで水温の上昇を抑える働きをもつとともに、溪流に落ち葉や枯れ枝などの有機物を供給します（写真1）。有機物は溪流にすむ生物の餌となり、食物連鎖によって他の生物へと養分やエネルギーが連鎖していきます。また、倒木が川の中に入ると川の流れに変化を与えて多様な環境を作ります。このように、溪畔林は微生物や水生昆虫、魚に餌を供給し、魚の隠れ場所や産卵場所を提供します。サケのように海から遡上する魚の繁殖の場所も提供します。

海に対する森の役割は、森林と海との距離、川の大きさや流域における土地利用などによっていろいろと異なりますが、森林は海の生物と直接的、間接的につながり支えているといえます。



写真1 落葉は溪流にすむ生物の餌となる（茨城県小川試験地）

#### 参考文献

山下洋・田中克(2008) 森川海のつながりと河口・沿岸域の生物生産、恒星社厚生閣